

## 発 達 2 (210~218)

座長 阿部健一・高橋 晃

## 210 乳児後期の事物操作の発達

——「入れる・出す」を中心として——

お茶の水女子大学 毛 塚 恵美子

## 211 幼児の手指操作における機能的左右非対称性について

京都大学 安 丸 廣

## 212 乳児期におけるラテラルドミナンスの発達

名古屋大学 河 合 優 年

## 213 発達助成に関する基礎的研究(7)

——板上歩行および平均台歩行の発達について——

大泉保育専門学校 阿 部 健 一

## 214 物体の空間移動を表象する能力の発達と身体運動の効果

大東文化大学 川 床 靖 子

## 215 包丁による切断作業について

——練習による熟達——

京都教育大学 清 水 歌

## 216 老人における知覚運動学習についての一研究

——追跡回転盤を用いた分散練習と集中練習について——

東北福祉大学 村 井 則 子

## 217 子どもの描画行動

——前後関係の表現と地面の及ぼす影響について——

広島大学 秋 山 弥

## 218 新生児の前庭刺激に対する心拍反応について

東京大学 高 橋 晃

210は口頭発表者の変更があった。毛塚(210)に対して、恒次(都精医研)から、事物操作のうちで特に「入れる・出す」に注目した理由は何かと質問がなされ、毛塚は2つの事物の同時操作の代表的なものであり、背後には空間認識上の転換が想定されるので特に注目していると答えた。

安丸(211)に対して、川床(214)から、認知過程と手指操作過程を区別するならば、認知レベルでの刺激の同一性を確保するため手のモデルがない方が良いのではないかとの指摘がなされ、安丸は本研究では両過程を区別して考えていないが、両者を区別するには他にも言語反応を用いた実験などが考えられるだろうと答えた。

河合(212)に対して、川床から、利き手と手操作との

関連について安丸の発表と一見矛盾していないかとの質問が出され、河合はスキルとパフォーマンスは捉えられる側面が異なっており、本研究は利き手を定義するのではなく手の使用のされ方を追っていると答えた。また、館(早稲田大)の質問に対して、河合から、縦断的研究をするにあたり特にリーチングの発達の後退の問題には焦点を当てていないとの答えがあった。

阿部(213)に対して、川床から「歩行」を特にとり上げたことの理論的根拠が求められ、歩行は全身運動の発達の基礎であり、かなり重度の障害児にも歩行の可能な者が多いことから「歩行」に負荷を加える研究を行っているとの答えがあった。

川床(214)に対して、大元(広島大)から実験手続についての質問が出され、紙の上にシールを貼る課題では子どもは実際に軌道にそってシールを移動操作することができるとの答えがあった。また、高橋(218)から、空間移動を表象する能力の発達に身体運動が効果的であると主張するためには物体の移動を観察するだけの統制群を設けるべきではないかとの質問が出され、川床はⅣ群の実験条件がそれに当たるが、より発達レベルの低い群に対しては観察だけの訓練を行うことは困難だと思われると答えた。

秋山(217)に対して、毛塚から、①奥行を上下・左右で表現する年齢段階の子どもに敢えて課題Bを与えるのは混乱させるだけではないのか、②Freeman(1972)の研究とはどのように関連するのか、との質問が出された。秋山は、①課題Bは技術的に他より難しくなるであろうとの予想のもとに使用し、②Freemanの実験は命名(イメージ)プラス対象物呈示で行われたが、本研究では教示(イメージ)のみの実験を行ったと答えた。また、滝坂(神奈川県私立幼稚園連合会)及び高橋の表Ⅰに関する質問に対して、課題B通過者は全員他の課題を通過しており、その際地面ストラテジーを使用するか否かは課題の呈示順によるとの答えがあった。

高橋(218)に対して、中村(札幌医大)から、覚醒時の2相性の反応は停止に対して生じる遅れて現われた上昇反応ではないとの質問が出された。高橋はtrend分析によれば2相性の変化は有意であり、前庭器は加速度を受容し、その加速度は連続的に変化しているため特に停止だけを取り出して考えることはできないと答えた。